

図書館報

書

二年五組
久保田探
クボタトモヤ

第136号(復刊第1号)
県立小野高等学校図書館



巻頭言

「復活図書館報」



校長 加嶋 幸彦

「あれから何年経つのか・・・。」
今年度は創立一二〇周年の節目
で新型コロナウイルスの影響を受
けながらも新たな取り組みがなさ
れました。その一つにあげたいの

がこの「図書館報」の復活です。
久しぶりの発刊です。

本校図書館に森重先生を担当と
してお迎えし、「図書館長」であ
るSSH推進部副部長の東口先生
(国語科)・図書館司書の森重先
生を中心に、図書館のさらなる充
実に取り組んでいます。書架を増
やし蔵書をより一層充実させると
ともに、空調設備のリニューアル
や雨漏りなどの改修を行い、図書
の貸出業務と自習室の機能がさら
に向上しました。図書委員会の活
動も再開し、在校生が利用しやす
いように改善しています。

また、PTAと本校教職員で組
織された「図書館充実支援委員会」
も復活し、皆さんの人生の道標と
して、日常の学習や探究活動など
に利用できる書籍の購入や蔵書管
理の充実など、図書館の充実のた
めに支援してくださっています。
「読書は心の栄養」といわれ、
読書は心を無限大に成長させてく
れます。
図書館が皆さんの心のよりどこ
ろとなることを期待しています。

小野高等学校図書館 2022年度の歩み

1学期

《目標》

・利用しやすい図書館を復活させ
る。
・蔵書の把握・会計の流れを把握
する。

掃除・片づけ・図書丸の整備
図書便りの発行
書庫内の蔵書の把握・整理

全生徒・職員からのリクエスト
選書による書籍購入
図書館充実支援委員会開催

図書館充実委員会とは

本校のSSH探究推進部に事務局
を置く、図書館の図書・機能充実を
支援する委員会。経費は生徒の入学
年度に賛同者一人当たり2000円
を頂戴し、本校の読書活動充実の一
助となるよう運営している。

2学期

《目標》

・図書委員会を中心に図書館を整
備する。

新規図書委員会スタート
委員による本のレビュー
1学期図書日より(3年生によ
る図書委員レビュー)
2学期図書日より(1・2年生
による図書委員レビュー)

選書基準の見直し
廃棄基準の見直し

3学期

《目標》

・「図書館報」復活に向けて
第136号(復刊第1号)発行

《今年度の成果》

1学期は図書館全体の掃除・片
付け・PC内の整理に始まり、PC
ソフトもバージョンアップ。利用
者情報、蔵書管理の情報など、中
身を一から整理することからスタ
ートした。さらに、2階書庫所蔵
の江戸時代以降の書籍の整理にも
着手することができた。

2年間、コロナ禍で書籍の新規
購入も十分ではなかったため、予
算配分、選書基準・廃棄基準の見
直しを行った。

今年度はたくさんの方から
蔵書を寄贈いただきました。感謝
申し上げます。

寄贈くださった先生(西田先生・小関先生・都築先生・
本校卒業生の方(西田先生には総
計200冊以上の貴重な書籍を寄
贈いただきました))

さらにPTAのご協力をいただ
き、今年度新たに館内の古くなっ
てきている書架や物品の見直し
ができた。年度末に新しく6段の書
架を3連、ブックカウンターワゴ
ンを導入する予定です。

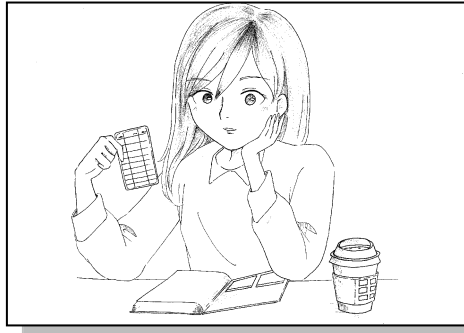


イラスト 美術部
(2年1組 田丸 桜月)作

最後に、1年間、掃除当番や蔵書整理の作業にあたってくれた3年G組のメンバーに感謝いたします。

《今後の課題》
図書委員の活動をさらに定着させ、図書館の利用・活用を全生徒・職員にアピールしていきたい。
また、生徒各々のタブレットから本校図書室の蔵書検索ができるように環境を整備していきます。整備終了後にはお知らせします。整で、挙って活用ください。

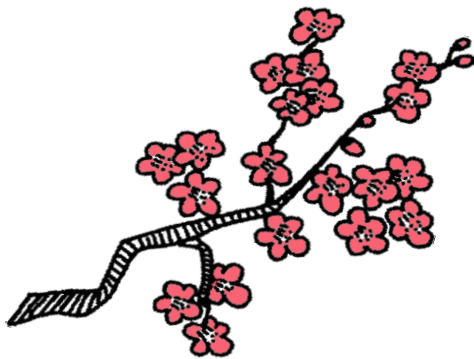
今年度 入荷した蔵書の分類別冊数集計

分類	0総記	1哲学	2歴史	3社会科学	4自然科学	5技術	6産業	7芸術	8言語	9文学	その他	合計
入荷数(冊)	19	24	41	101	61	11	8	21	22	269	93	670
割合	0.0144	0.0328	0.058	0.1169	0.103	0.0273	0.0127	0.0277	0.0283	0.1674	0.4119	

2022年度所蔵数(今年度)

2023/2/20現在

分類	0総記	1哲学	2歴史	3社会科学	4自然科学	5技術	6産業	7芸術	8言語	9文学	その他	合計
所蔵数	448	1020	1801	3631	3186	848	395	859	879	5199	12794	31060
割合	0.0144	0.0328	0.058	0.1169	0.103	0.0273	0.0127	0.0277	0.0283	0.1674	0.4119	



令和4年度 クラス対抗ランキング

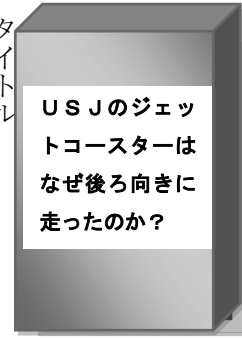
順位	学年	組	冊数
1	1	1	88
2	2	5	80
3	1	4	70
4	1	2	60
5	1	3	52
6	2	2	49
7	3	8	37
8	3	9	26
9	3	2	25
10	3	5	22

令和4年度 貸出図書ランキング

順位	書誌ID	書名	著者名	貸出冊数
1	27209	右四間で攻めつぶす本	中川大輔	11
2	12796	離散数学「数え上げ理論」	野崎昭弘	10
3	24119	粘菌その驚くべき知性	中垣 俊之	9
4	29705	離散数学入門：整数の誕生から「無限」まで	芳沢光雄	6
5	25586	図解でかんたんアルゴリズム	杉浦 賢	5
5	25843	白と黒のとびら	川添 愛	5
5	30660	同士少女よ、敵を撃て	逢坂冬馬	5
5	30665	人新世の「資本論」	斉藤幸平	5
5	30902	君を愛したひとりの僕へ	乙野四方字	5
10	6600	日本語と外国語	鈴木孝夫	4
10	8022	夢判断 上	プロト 高橋義孝訳	4
10	8023	夢判断 下	プロト 高橋義孝訳	4
10	9795	医者言葉がよくわかる	米山公啓	4
10	10569	日本人はなぜ英語ができないか	鈴木孝夫	4
10	21083	自分を磨く方法	アレクサンダー・ロックハート	4
10	25492	ヤル気の科学	イアン・アース 山形 浩生訳	4
10	29394	三体 = The Three-Body Problem / The Three-Body Problem	劉慈欣	4
10	29770	高校数学ディープラーニング	金丸隆志	4
10	30008	SDGs	南博	4
10	30670	香君(下)	上橋菜穂子	4
10	30903	僕が愛したすべての君へ	乙野四方字	4

私の本棚

校長 加嶋幸彦



1 タイトル 『ユニバーサル・スタジオ・ジャパン USJのジェットコースターはなぜ後ろ向きに走ったのか?』(角川書店)

2 作者 株式会社 刀 代表取締役CEO 森岡 毅 氏

3 あらすじ

大阪市にある「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン(USJ)」は、2001年にハリウッド映画のテーマパークとして現在の地に誕生し、当初は世界中のテーマパークより早いペースで開業からの来場者数が1000万人を突破し、年間来場者数も1100万人を達成しましたが、相次いだ不祥事等により集客減となり、2004年の経営破綻後には700万人台前半まで低迷していました。破綻後、USJの代表取締役CEOとして米国ユニバーサル社から招かれ、わずか数年で経営再建を成し遂げたグレン・ガベル氏が、マーケティングのプロとしてヘッドハンターした人物が森岡氏

で、入社した2010年から彼主導の改革が始まります。入社までに市場データを読み込んだりパークを歩いたりしながら、集客減の原因ともいえるべき「大きな敵」が見えてきます。

そして、この会社が飛躍的に成長するために成功の確度の高いと思われる「3段階ロケット構想」を生み出します。1段階目のロケットはテーマパーク事業の最大のボリュームゾーンでありながら、USJの長年の弱点であった「家族連れ顧客(ファミリー)」の取り込み、2段階目は遠方からゲストを集客できる「ものすごい何か」を作ること、3段階目は、この会社のノウハウを複数の場所に展開して会社を大きく飛躍させること、この3つの構想を打ち出して改革が始まりました。

そして、1段階目のロケット「ユニバーサルワンダーランド」、2段階目のロケット「ハリリー・ポッターのテーマパークの誘致」への経営資源の集中というアイデアにたどり着きます。早速この案をCEOや経営幹部に提案し経営規模と投資の「不釣り合いさ」から反対されますが、需要予測法を駆使しこの冒険を成功させる勝算があると説得し、2014年度のオープンまでの3年間を乗り切る、様々なアイデアが展開されました。

この本では、資金や人、時間が

ない中、企業としてどのようなアイデアを捻りだし切り抜けてきたかが書き記されています。また、ビジネスは戦略的に物事を考えて成功確率を高めるための計算をしますが、計算で読み切れないことも多く、追い詰められて万策尽きたと思ったときでも「情熱」が予測もできない局面突破を呼び込むことがあると述べています。

4 好きなシーン

USJには魅力的なアトラクションが多数ありますが、そのアトラクションには、集客するためのスタッフのアイデアが散りばめられていきます。森岡氏がスタッフとともにそのアイデアを捻りだし、どのような方法で具体的な形にしていくか、そのプロセスが明確に感じ取れるところで、ワクワク感が高まっています。「ピンチをチャンスに変える」ために、苦悩の末、その苦悩からどのように解放されていくかを感じてほしいと思います。

また、その過程の中で、学校での学習の必要性が述べられています。「学校で学んだことが何の役に立つのか」と言われることもありますが、アイデアを生み出すために高校での知識や技能が基本となっているようです。高校での学習の必要性が再認識でき、学習意欲の向上につながるのではないのでしょうか?

5 選書の理由

USJは日本の代表的なテーマパークとして有名ですが、そのテ

ーマパークを維持していくために企業のあるべき方向性が明確に示されている、この本が出て10年以上が経過しています。この本に書かれている企業戦略は、先行き不透明と言われるこれからの時代を生きる若者たちの参考になるものだと思います。

読書離れが進む中、USJのアトラクションを思い浮かべながらこの本を読めば、森岡氏が伝えようとしていることは十分理解できると思います。

自ら生み出したアイデアが現実化して人を幸せにしていることに生きがいを感じるために必要な力をぜひ身に付けてほしいと願っています。

6 生徒へのメッセージ

魅力あるテーマパークには、華やかさが見られますが、その裏でスタッフの色々な苦労があります。「人生は挑戦の連続」と言われますが、将来、どのような人生を送るにしても順風満帆には進みません。でも、その先には、自分にとって、あるいは多くの人々にとつて、素晴らしいことがあります。苦勞を惜しまず様々なことにチャレンジしてください。

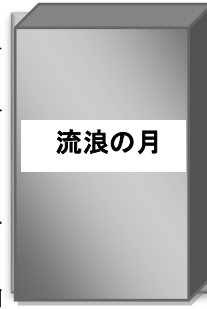
7 図書委員会への期待

いよいよ図書館報が再スタートします。図書館を利用する人たちが様々なジャンルの本に親しめるよう情報発信としての要となることを期待しています。

図書委員

私の勧める一冊

流浪の月 風良 ゆう



1年2組 上山 釉珠乃

男の人はビニール傘を私の頭の上に移動させた。「うちにくる？」ある日突然、両親と暮らせなくなった家内更紗(かないさらさ)は、伯母さんの家に引き取られることになった。今までの常識が、常識になり、安心できない日々が続き、畳に足を投げ出すことすらできなくなった。

いつものように追いかけてくることが終わって、みんなが帰った後、更紗は1人公園に戻り、本を読んでいた。ずっと、今までの生活に戻りたいと思っていた。のろのろと見上げると、透明なビニール傘を差した男の人が立っていた。

「帰らないの？」
「うちにくる？」

男の人は文(ふみ)といった。自分をあそこから助け出してくれた文は、命の恩人になった。

この先、生き延びられる術があるとしたら、文の隣だけだ。

そんな生活にもまた、終わりが訪れる。

「家内更紗ちゃん！」
二人の生活に慣れてきたころ、文と更紗は共に動物園に行った。しかし、行方不明だとニュースに写真まで出ていた更紗の顔を知らない人はもういなかった。

もう大丈夫だよ、怖かったねと警察官は言った。

「文はなにもしてない」
「うん、わかった」

「ちがう、わかっている。文は優しくなかった。文はわたしにひどいことはなにもしてない。」

「文は悪くない。文はー」
「更紗ちゃん、もうおうちに戻れるよ。」

今ではもう高校を卒業し、働いている更紗。しかし、「家内更紗」と言う名前はいつまで経っても更紗を自由にはしてくれなかった。「みんな、自分が優しいと思ってる。」

この小説に出てくる人たちのように、元被害女性に同情し、辛かったねと声をかけることは、優しい行動ととらえる他ない。しかしそんな行動に対して更紗はこう言っている。すごく考えさせられる一文だ。

女兒を誘拐した異常な大学生と、かわいそうな被害女兒。世間ではそれが本当の文と更紗ということになっている。

この事件をきっかけに更紗の人生は大きく変わってしまった。そんな更紗の人生は、まだまだ落ち

着くことを知らない。優しさとは何か。事実とは何か。あなたがこの本を読み終える頃、きつとこんな葛藤が生まれていることだろう。

青猫 萩原朔太郎



2年1組 桐山 有

あなたは萩原朔太郎を知っていますか？萩原朔太郎は大正時代を中心に創作を行った日本の詩人で、近代詩の新境地を開拓し「日本近代詩の父」と称されています。国語の教科書にも掲載されているので、名前は見たことがあるかもしれせん。

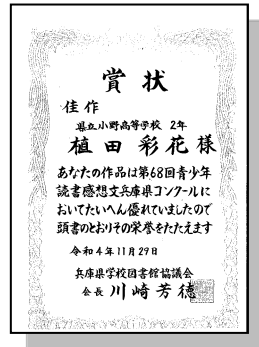
私は萩原朔太郎の詩が大好きです。理由としては、萩原朔太郎の詩には独動的な世界観が魅力的であるということが挙げられます。

詩人として有名な方はたくさんいらっしゃいますが、萩原さんのような世界観を作り上げられる人は少ないと思います。萩原世界観を体験するのにピッタリな作品として、私はこの「青猫」を紹介したいと思います。まず、この作品について軽く説明します。この作品は萩原朔太郎の第二詩集として

前作の「月に吠える」に続き刊行され、五十五編が収められています。タイトルである「青猫」とは萩原朔太郎曰く、英語の Blue の「希望なき」「憂鬱なる」「疲労させる」の意味を含み、「物憂げなる猫」を表現しています。では、私がこの作品をおすすめとして紹介しようと思った理由について話したいと思います。一つ目の理由は、この作品が萩原さんの作品の中で最も芸術性が高いものだという事です。前作と比べるとどこどなく憂鬱な感じが漂っています。その分言い回しや独特なリズム観を組み込んだことで美しさが際立つようになっています。それを大きく表しているのが「ぼくteryの世界」という作品です。これは本来見えるはずのない世界を萩原さんが詩にしており、少し気味が悪い感じもありますが、何度も繰り返し表記されるある一文がいくつか読みたくなってしまいうような、中毒性を持っています。二つ目の理由は、強い世界観が現れた作品が多く収められているという事です。「猫」という詩がこれを顕著に表しています。ほとんどが会話により構成され最後まで理解することがとても難しいです。このように、「青猫」はたくさん魅力を持った数多くの詩を読むことが出来ます。普段に読むような本に飽きてきたという人にはすごくおすすめです。この作品を読んで、未知の感覚を味わってみてください。

おめでとうございます
第68回青少年読書感想文
コンクール入賞作品を
ご紹介します！

令和四年度 青少年読書感想文
文兵庫県コンクール受賞作品
(第68回青少年読書感想文コン
クール受賞作品)



佳作

2年5組

植田 彩花

課題

『夢と人生』

書名

『その扉をたく音』

著者名 瀬尾 まいこ

出版社 集英社



送るのだろう。高校二年生になり、私は今まで以上に自分の将来を意識するようになった。夢は医学研究者になること。だが、その夢に実現のために私が理想とするものとはとてもハイレベルだ。母は、高みを目指すのは良いが、本当に大丈夫なのか」と私に言う。今、私は先行きの見えない現状に悩み続

けている。物語の主人公、宮路は二十九歳。彼は無職で、親からの仕送りを頼りにして生活している。彼自身は自分の情けない現状を意識しているながらも、ミュージシャンになるという夢を言い訳にして、何もしない日々を送っていた。もはや自分が何になりたいのかさえ分からなくなっていたのだ。私には、そのような彼の姿が自分自身に重なって見えた。年齢も身を置く環境も違う。しかし、将来に悩み、自問し、それでも自分に敵しくなれない彼を私は自分のことのように思いながら物語を読み進めていった。しかし彼はある出来事をきっかけに変わっていく。それは彼が老人ホーム「そよかぜ荘」でギターの弾き語りを演奏した時のことだ。サックスを演奏する介護士、渡部君に出会う。渡部君を演奏に感動した彼はそよかぜ荘に通い始め、強引に渡部君とのセッションの約束を取り付ける。そこで練習をする中で重ねていった多くの経験が、宮路の考え方を、そして人生を変えていったのだ。宮路とは対照的な祖母と同居しながら、介護士として働く渡部君は、時に辛辣な言葉や達観した言葉を宮路を諭していく。その中でも私は特に印象に残っている言葉がある。「祖母と暮らして介護士になると、勝手に大げさな感動ものにされちゃうんですけど、何一つ

僕をあきらめてもいいないし、不自由してないんです。なりたくて介護士になった、それだけで。」私は、ハッとされた。そもそも、私が医学研究者になることを志したのは癌を経験した母がきっかけだった。苦しむ母の姿を見て、「病気で苦しむ人のために自分にできることはないのか」と考えたのだ。その点では、私と渡部君は違う。だが、結局私は「なりたくて」医学研究者を目指している。研究をしたい。人のために働きたい。その思いだけは絶対にぶれずに心の中にある。この思いをもとに私は努力していかねばならないのだ。渡部君のまっすぐな生き方に刺激を受けて、私は自分のすべきことを再確認した。また宮路の成長に大きく関わったのが老人ホームの利用者である水木さんの存在だ。水木さんは宮路のことを「ぼくら」と呼び、度々買い物頼む。その内容はどれも抽象的なものばかりだった。しかし、彼はその買い物に毎回真摯に向き合うのだ。私はそのような宮路の姿に心を揺さぶられた。相手の要望に添ったびつたりなものを考えることはそう簡単なことではない。私が驚いたのは、彼の観察力だ。彼は水木さんの普段の行動や性格について考えるのだが、その内容はどれも細かいものだった。それは彼がよく周りを見ていて、相手のことを考えられているからだと思っ

た。敬意の念を抱いた。私は自分のことで目一杯になってしまいがち、周りが見えなくなることがよくある。いざ誰かのことを考えてみても案外知っていることは少ない。彼の姿から独りよがり生きていく自分に気づかされた。私も彼のように周りを見ることができるようになり、思いやりのある人になりたいと思っ

最終的に宮路はそよかぜ荘で渡部君と演奏会を開き、それは成功を収める。その中で、彼は「落ち込んで絶望を味わっても、また笑い転げられる日々が来ること、心を揺らすできごとが待っていることを伝えてくれたもの」「何年もの間あきらめきれずにしがみついていたもの」について考える。それは音楽ではないと彼は考えるが、その答えは結局はつきりとは書かれていない。私は、その答えは「人」だと思う。宮路を成長させたのは、水木さんを始めとする人達との出会いだった。それは私も同じだ。自分と違う考え方が私の価値観を深めてきた。仲間や応援してくれる人の存在が、私を励ましてくれた。その結果が今の私だ。しかし、人の命は永遠ではない。誰かとの関係は「今しかない」ものだ。宮路は水木さんの死に直面し、悲嘆に暮れながらも自分を応援してくれていた人達の存在を実感する。そして前向きな人生を歩み始めるのだ。私は人と関わる一瞬一瞬の大切さを強く感じた。

図書委員から 突撃インタビュー

私がこの物語を通して考えたのは「人生」についてだ。人生は長い。だからこそ悩むことも多いだろう。だが、忘れてならないのは「前向きに生きること」「出会いを大切にすること」「自分に正直に生きること」だ。
私は確固たる夢を持ち、悔いなく信念を貫きたい。そして、宮路が成長していったように、人とたくさんかかわって経験を重ねたい。

今回は、75回生 学年主任
大江佐智子先生にインタビューさせていただきました

2年3組 高瀬 詩恩(図書委員)
田中 幸青(HR委員)

「大江先生、こんにちは。この度、卒業を迎える75回生学年主任の大江先生にぜひ、お話を聞きたいと思いいんタビューに参りました。いくつかの質問をご用意しました。よろしくお願いいいたします。」

① 高校生に読んでほしい本・ジャンルは？

大河小説やシリーズもの
時代小説・ファンタジーなど
何でもOK。

② その中でもイチ押しといえ
ば？そしてその理由は。

『グイン・サーガ』シリーズ
栗木 薫 ハヤカワ文庫

この作品は架空の世界、架空の時代に生きる主人公グインを中心とするさまざまな人物の生と死の波乱を描いたサーガ(大河小説)です。第1巻が発表されたのは1979年。以後2009年に作者が亡くなるまでの30年間に本編130巻+外伝22巻が刊行されました。未完のまま終わってしまったのかと思われましたが、2012年以降、複数の作者による執筆が再開され、現在も続編の刊行が続いています。(ちなみに最新刊は昨年11月に出了た第148巻)教師になつたばかりの頃友人に勧められて既刊分を一气読み。以来新刊が発売されるたびに読み進めてきた作品です。シリーズものを読む楽しみは二つ。一つは現実世界で自分自身が歳を重ねていくのと同じように作中の人物の成長や国の興亡などを追体験できるということ。もう一つは、次の刊が刊行されるまでの数か月(あるいは数年)の間、期待に胸を膨らませながら待つ時間を過ごせるということ。10代の今の時期にそんな楽しみを味わわせてくれる作品に出合えたらすばらしいことだと思います。

③ 一か月に何冊本を読みますか。
一応一週間に一冊を目標にしています。

④ 先生が心に残っている本は？

『大地の子』山崎 豊子

これは中国残留孤児の話です。圧倒的なリアリティがあり、平和な暮らしとの違いを痛感しました。

⑤ 国語の教師になつた理由を教えてください。

小さいころから本が好き。国語が一番好きだったから。

⑥ 図書館への希望はありますか？

可能な限り、話題の新刊を入れてほしい。

⑦ 読書に関して、生徒へのメッセージを。

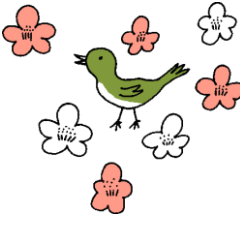
読書は人生を豊かにしてくれま
す。「何かのための読書」だけではなく、「ただただ楽しんで読む」
こともお勧めします。

⑧ 卒業生75回生の特徴といえ
ば？

素直な生徒たち。

⑨ 最後に、高校生の皆さんへの思
いを聞かせてください。

変化が激しい世の中に対応して
いくのは大変だと思いますが地に足
をつけてしっかり頑張つて欲しい。



いくつか本の紹介を

SSH探究推進部 東口昌央

本の紹介の体で、なぜ国語
力が必要なのか、国語科教
員として考えていること
を。

2022年を象徴する漢字として「戦」が選ばれたことはご存知のことでしょう。昨年もいろいろな出来事があるなかで、ロシアによるウクライナ侵攻は大きなインパクトがあったと思う。遠い場所での出来事だと思っていたとしても、円安や物価高、エネルギー・食糧危機など、私たちの身の回りにも直接的な影響を及ぼしていることに、グローバルゼーションの進展を実感させられる。どこまで関心を持てるか、どこまで想像力を働かせることが出来るか、そして、どうすれば自分たちが生きていくうえでよりよい社会をつくる事が出来るのか、あらゆる出来事は、強弱はあれ、確実に自分自身に関わっている、そういったことを考えながら、ふと、内田樹の『こんな日本でもよかつたね』(2008年7月 バジリコ、2009年9月 文春文庫)に書かれていた一節を思い出した。
私たちは未来について考えるときにどうしても「現在」という固定的な視座に腰を据えて、そこから「未だ来たらざるもの」

を推量しようとする。

「未来」というのは定義上、「何が起こるか分からない」ものである。

そのことは理屈ではわかってい

けれども、「現在」に腰を据えていると、「できることなら、我が身には可能な限り『わけのわかったこと』だけが選択的におこつてほしいものだ」という無意識の欲望の浸潤を防ぐことができない。

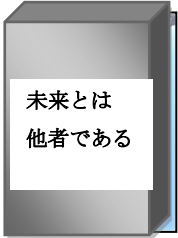
この無意識の欲望はかならずや「まさか、『こんなこと』が起こるとは思わなかった」ことの到来の予兆を過小評価するよう

に私を導く。現在の視座に腰を据えている限り、私たちはすでに起こったこと、すでに知っていること、すでに経験したことを量的に延長することができない。

だが、未来は決して「現在の延長」ではない。そのことは骨身にしみてわかっているはずなのに、私たちはそのつど未来を「現在を量的に延長したもの」として把持しようと空しく努力する。

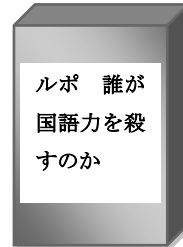
(内田樹「未来とは他者である」文庫版)「こんな日本でよかったね」144頁

内田樹は、ユダヤ人哲学者・レヴィナ



スの『時間と他者』を引きながら、「未来とは他者である」ということを繰り返していくのであるが、内田も言うように、「未来」はどのようなものであるのかはわかるわけがない。実際、昨年(2022)の1月の様相を正しく把握できた人は誰もいないはずである。「一寸先は闇」とはうまい言葉だが、本当に私たちは(先が見えない)のである。しかしながら、「見えないこと」を見えないままでは受け入れられず、不安や恐怖を抱くようになり、それらを払拭するために「見えないこと」を見えないように思い込もうとしているように思う。

政治的な偏りが忌避されるべき学校現場であるが、昨今の政治状況を見ても、「見えないこと」を想定した準備が必要だといわれるようになり、国家の原理原則であるはずの憲法の遵守よりも改訂が求められるようになっていく。それぞれの政治的な立場からなされる憲法論議を見ても、何かがおかしいように思えるのである。それは起こりえる「未来」を過剰に演出する一方で、「現在」にできることをやりきらぬまま、「現在」抱える問題を不可視化しつつ、「未来」の問題を可視化し解決しようとする欲望に満ちた、「空しい努力」に思えるからかもしれない。そして、「いま」「ここ」の問題そのものを解決する実直な「努力」がなされていないように思えてならないからかもしれない。



らう。

子どもたちの教育が、家庭と学校だけに押しつけられ、各家庭での経済格差がそのまま教育格差に直結し、生徒たちの言葉の獲得状況も格差が広がっているなかで、さまざまにバックグラウンドをもつ子どもたちを一つの教室で教師たちが教えなければならぬ状況に、社会全体の理解も及んでいないこともあり、学校も対応し切れていない。言葉が個人の内面を形成していくことを考えると、言葉の獲得状況に格差があるという

ことは、複数の個人間のコミュニケーション・成立要件として必要な、同じ言葉がもつ共通認識・共有

では、その「いま」「ここ」の問題とは何かと言われれば、あまりにも取り上げるべきことが多すぎるので、矢部宏治の『知ってはいけない』(2017年8月 講談社現代新書)や山室信一の『憲法9条の思想水脈』(2007年6月 朝日選書)、保阪正康編『50年前の憲法大論争』(2007年4月 講談社現代新書)など、読んでもらいたいところであるが、この学校という場で取り上げるべきだとすれば、石井光太が『ルポ 誰が国語力を殺すのか』(2022年7月 文芸春秋)で取り

上げていた、共通理解を成立させるための言葉の力を人々が失っていることである。通理解が成立しなくなっているということでもある。この本のなかで、石井がショッキングな事例として取り上げ、このルポをまとめたきつかけとしているのが、新美南吉の「ごんぎつね」を取り上げた小学校の授業である。「ごんぎつね」の主人公・兵十の母親の葬儀の場面で、鍋で何かが煮られている様子が描写されているのを読み、少なくとも数の生徒が、煮られているのは母親であると解釈したことがある。何が煮られているかは書かれていないのであるから、母親が煮られているという解釈が表面上の論理としては成立するとしても、倫理的な側面も加味したうえで論理としては絶対的に成立してはいけなはずである。

しかし、このような解釈を可能にする子どもたちが存在していることに、善悪の判断すらも共有できなくなっている事態が眼前にあることに衝撃を受け、石井はこのレポートをまとめたのであるが、石井が受けた衝撃は、私にとっても衝撃であった。これは小野高校の問題ではないと思うかもしれない。しかし、そういう子どもたち、そういう子どもから成長した大人たちと出会わないわけでは決してない。いや、むしろ、自分たちもそうなのかもしれない。自分にとって正しいことが、他の人にとって正しいこととは何だろうか? とともにこの社会に、この世界に生きる

